

牧野富太郎博士の雑草観をたどる

森田 弘彦

2023年の4月から9月の朝の連続テレビ小説（朝ドラ）、「らんまん」は「日本の植物分類学の父」と呼ばれた牧野富太郎博士（1862-1957）をモデルとした物語である。牧野博士は専門の研究論文執筆の他にも各地の植物同好会・植物愛好家と幅広く交遊し、世人向けの植物啓蒙書を多数出版された。「雑草のよもやま」でも随所で博士の記事を引用させていただいている。

牧野博士の名言のひとつとされた「雑草という草はない」はその出典が不明のままであったが、近年『「雑草という草はない」は牧野富太郎博士の言葉 戦前、山本周五郎に語る 田中（純子）学芸員（東京・記念庭園）が見解』の記事が出た（高知新聞社 Web 版 2022.08.18 <https://www.kochinews.co.jp/article/detail/586935>），印刷・出版はされなかったものの事実であったようだ。

牧野博士の多くの啓蒙書の中には「雑草」の語を含む「入江彌太郎と合著 雑草の研究と其利用，1919」と「雑草三百種，1930（図-1）」の2冊がある。前者の「序」には以下のようにある。

・・・天然物の多い中に雑草も亦甚だ多い。世人は徒に之を雑草と呼んで軽んじて敢えて顧りみないけれども此にも利用して人間の用となすべきものが頗る多いのみならず成るべく未用のものをも更に研究して吾人の資に供することを心掛けねばならぬ。

此様な見地からして此雑草の研究と其利用の書が出来たが、これは主として入江彌太郎君が起稿したもので私は同君の志を嘉みし、此を訂正修補したのである。・・・

従って牧野博士の本書への関与は小さいが、後者（図-1）の「題言」には以下のようにある。

・・・東京植物同好会の幹事で東京帝國大學農學部講師の向坂道治君から私の標品を寫眞に撮つて不十分な標品を作る人々に示したら、或は幾分かでも啓蒙的なものになるだらうと勧められた。雑草の寫眞標品は僅に二百八十餘枚ではあるが、しかし初心の人に見せて少しでも良い標品を作る参考になれば幸甚だと考へ、・・・

こちらは、牧野博士が「雑草」と考えた282枚のさく葉標本の写真に短い解説を付した小型本で、「タマガヤツリ：水田沼澤の中、チャウジタデ：田間の濕地、イヌビエ：水田又は其附近などに多く」など農耕地の雑草が多く掲載されるが、中には「イガホオヅキ：山野、オホバノイブキバウフウ：海邊、サラシナショウマ：溪間溪側等、タニギキヤウ：山地の陰地」などの「山野草」も含まれる。「雑草」の文字は書名と題言に出るのみで本文にはない。本書発刊2か月前の1940年9月には、主著「牧野日本植物圖鑑」の初版が出ているので、複数の著作をほぼ並行して執筆した牧野博士の超人ぶりが偲ばれる。博士に執筆を勧めた向坂道治氏は「牧野日本植物圖鑑」の「序」で「斡旋盡力ニ負フコトノ多大ナリシ」と献辞された方で、牧野博士との交流の実態が最近になって掘り起こされた（田中純子 向坂道治と牧野富太郎の交流やまとぐさ4，2020）。

「雑草という草はない」は「雑草という和名の草はない」の意味なので、牧野博士も雑草の概念はお持ちであったが、水田のタマガヤツリ、イヌビエも、街中の掃き溜めに生える草もすべて下記のように「愛すべき植物」であったに違いない。

・・・路傍庭砌ノ雑草ノ花デモ嘆賞ニ値スルモノハ決シテ鮮クハナイ 植物ヲ學ビシ人々ハ此ノ如キ雑草カラモ趣味アルモノヲ選ビテ知り得ルヲ以テ其樂ミノ範圍ハ夙カニ常人ニ超エテ居ル・・・（植物趣味ノ鼓吹（承前）植物研究雜誌1(4)，1917）



図-1 「雑草三百種，1940」の扉（A）とタマガヤツリ・チャウジタデのページ（B）（筆者蔵）

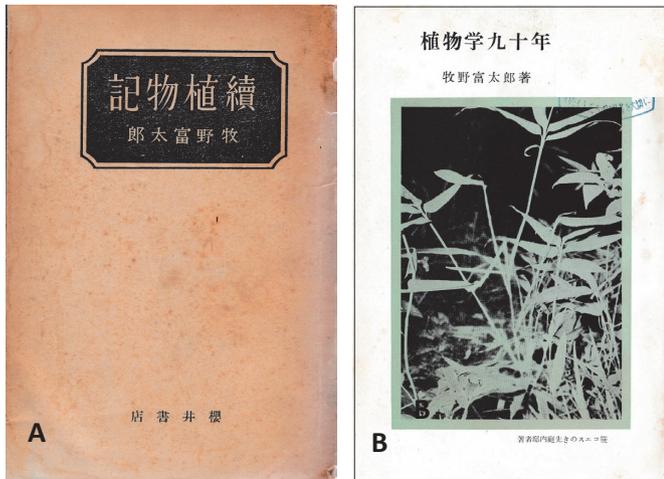


図-2 「野外の雑草(草)」の記事を載せた「続植物記, 1944」の表紙(A)と「植物学九十年, 1956」の扉ページ(B) (筆者蔵)

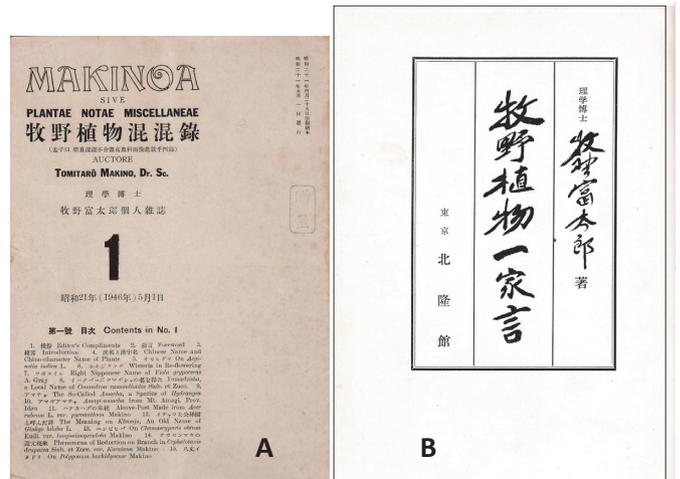


図-3 「雑草」の語を含む記事が載るようになった個人雑誌「牧野植物混混録」の第1号の表紙(A, 1946)とワルナスビなど3種に「ダメ出し」をする記事を載せた「牧野植物一家言, 1956」の扉ページ(B) (筆者蔵)



図-4 牧野富太郎博士をして「悪草、ヤクザ者、塩を振り蒔け」と言わしめた雑草、ワルナスビの花と未熟果の断面



図-5 東京都練馬区の牧野記念庭園の案内パンフ(A, 1990年代?)と「開園50周年記念誌, 2008」の表紙(B) (筆者蔵)

さらに「野外の雑草」と題し、「世人はいつも雑草々と貶しつけるけれど、雑草だつてなかなか馬鹿にならんもんである、(中略) 場合によれば美しい花を開く花草よりも更に趣味のあるものが少なくない。(後略)」として、タケニグサ、スベリヒユ、エノコログサおよびオオバコを取り上げた記事でも、植物としての興味を述べたのみなので(続植物記, 1944 植物学九十年, 1956に「野外の雑草」で再録 図-2), 防除などもつてのほかであつたらう。

第二次世界大戦後の記事を読むと雑草の扱ひも少し変わったようで、個人雑誌「牧野植物混混録」の1-8号(1946-48 図-3A)には「雑草」は次のように書かれた。

○キク科のブタクサ(略)、其後此雑草が諸處に進出して其分野が大に廣くなつた、(東京邊から消えた植物殖えた植物3号1947)

○キク科のヒメジョオン(略)は元来北米の原産植物で *Erigeron annuus* Pers. の學名を有する大雑草である、(ヒメジョオンの苗は存外美味である5号1947)

○スベリヒユは古名ウマヒユ、(略) 抜き棄て置いても中々枯死し難い力強き一年生の雑草で、(略) 次にイボクサは(略) 軟らかい一年生雑草で、(疣を落す二つの草5号1947)

○其れはホモノ科(禾本科)のスズメノチャヒキ(略)の事である、即ち野外荒地の一年生雑草で其實は敢て食用に値せぬから誰れも之を顧みる人はない、(燕麥はカラスムギでもOatでもない7号1948)

最晩年の「牧野植物一家言, 1956(図-3B)」ではついにワルナスビなどに「ダメ出し」をした。

○・・・下総の三里塚にも、大分外来の御客が御座遊ばさる、其中にも、ワルナスビは兎にも角にも、決して人上に置け無

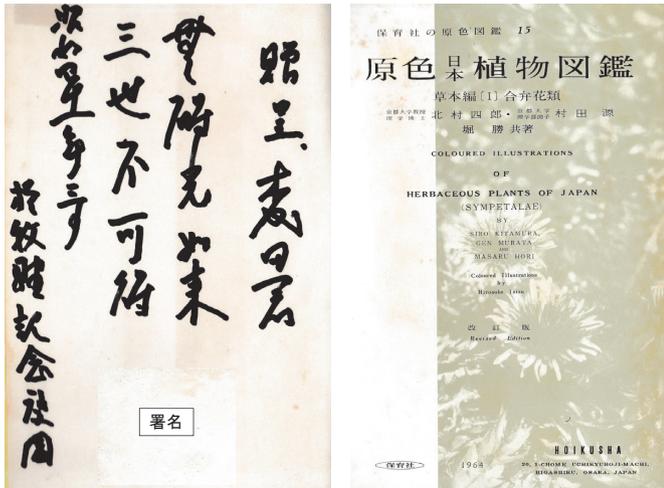


図-6 牧野記念庭園のA氏、K氏より頂いた「原色日本植物図鑑草本編（保育社）」の贈呈句（筆者蔵）

い厭な雑草で、一日も早く我が日本の土地から、退去して貰ひたい厄介者だ、幾ら無く成つても、ちつとも惜しく無く、もう再渡来は、全く以て御免候へだ、そして七里ケッパイ、塩を振り蒔け、振り播けと祈り申す、(中略) 右のワルナスビ(悪ル茄ビ、私の新称)を一度、東大泉町の自園に移した所が、イヤハヤ、繁つた事繁つた事、洵に始末におへ無く成つて、ヤット根絶させて仕舞つた、後略(アメリカアキノキリンサウ、ハウキギク、オホイヌノフグリ、ワルナスビ p.84)

- ハルジョランとは春女苑の意で在つて、(中略)・・是は全くの雑草で、人間には何んの用も無い、(繁殖の盛んなハルジョラン p.127)
- ヤブカラシは、一の蔓生雑草で、何んの役にも立た無い、単

に役に立た無い許りで無く、無暗矢鱈に蔓こり廻り、無くしても決して惜しくは無い者である、(後略)(迷惑至極なヤブカラシ p.181)

「我が園中に植ゑ」た後に愛想をつかして困り果て、「悪草・ヤクザもの・始末の悪い草・害草(随筆 植物一日一題、1953)」と断じて、ワルナスビ(図-4)にさらに追い打ちをかけた。

牧野博士の「雑草観」は、農業上の雑草に注目した白井光太郎博士のそれ(雑草のよもやま1、植調49-5、2015)とは大分異なっていたが、最晩年には「愛せない植物=雑草」にも言及することとなった。

上記の「東大泉町の自園」は、牧野博士が1926年から逝去まで住んだ現在の東京都練馬区東大泉で、没後は練馬区が「牧野記念庭園」として公開した(図-5)。筆者は中学1年の時(1960年)に練馬区教育委員会の課外活動「科学教育センター(生物物理学班)」に参加して、「牧野植物園見学」の行事で初めて訪れ、博士の2女、牧野鶴代様に説明して頂いた。家から近かったのでその後頻繁に訪れ、K職員と博士の身边をみておられたA老人に親しくしていただいた。少年の採集した博士に所縁のある植物を園内の隅に植えて下さり、「保育社の原色日本植物図鑑 草本編」を、東京をはなれる際にお二人から(図-6)、また「精選牧野植物図集」を、編集された牧野鶴代様から頂いた。A老人は博士の研究態度と共に、ご家族を含めた生活上のご苦勞も口にされ、「植物分類学ではメシは食えない!」とおっしゃった。自分はこの言葉を、勉強をさぼるための方便に使ってきたようで、今でもA老人に申し訳なく思っている。